

029  
449  
1

長興集



027  
449  
1

愛知女子  
第 11845 號  
圖書

子  
子  
子

578/1  
11845

物年のけ免とる除之集を編一  
兼且乃也一畫一せいかのいなきも所  
是法也一と人曰きは兼  
たふをまじもおおまじり古の之乃物  
妙意をのちめをあの？を具兼を  
あふがきなきと免少やんいし  
たし一兼小冊をいし事ふりぬ

寛政壬子の女

春鷗舎末之述



座上一順

私茅布中の扇をひら

來之

う久ひ夢やおそき東枝の力

ふまぬ垣れの雪乃むつ雨

秋水

陽火よいとけの車さしとま

笠笠

條りけしきやこぬけ別飯

芥水

こけり来る松原おしの折み

雪馬

海峯をく鐘うけりあり

稚石

館柳の詩をさめくま佐津

松波

横川り室一丈おしり

眠花

あまわれく不空小重いふあり

素流

やううもの鼓まはやく

錦車

大せりち水玉を思ふ秋恋ハ

羅扇

こくとやうくおの足吹

仙國

聖鳥のかりの月ふ啼さるる梅風

饑民をさふ一倉乃粟 警御

木と腹試おとこのこ君さるる故園

神人この公事の海はるる蓬雨

斧入るるをさあき花の山 焠虹

長し羽織を誰もさあま 巴山

たふくの流新供侍を飛おり 移石

如房もくもさ中侍母のふる漢水

落いりのわとまきく見ゆる海の月 駝丹

小刀添へ盆乃水亦柳 百長

次の間ハ皆お酒に跡はるる 春山

中へくくと鳴 濠庭の懸 竹之

下略



春興各詠

松のしおれに春はあけまりを月	秋
水	花
をのり乃光也比叡の雪の上	魚
花	並
歩千里日枝をたまく梅空	芹
水	水
囊中子踏やうすのむらさ	雪
馬	雅
矢指ののおきぬききや梅の真	石
あすくくやうまうあ松月	松
	波

夕月小篆篆礎て居り  
 銅蓮の状にこはは柳の如  
 去雨や膏赤るまきつる  
 大原ゆふのさか竹 萱掛  
 垣間見ゆ 烟をききて梅  
 今昔遠くや望川の水乃  
 象をり 吹くおふ 燭中  
 眠巷 仙國 妻流 羅扇 故園 錦車 蓬雨

冷雪やふゆの釜にあり  
 かつらと礎ぬもまはし 柳  
 浮海碛の形にうらむを  
 山とてや花葉まきく 春の  
 夕さげやゆ梅のりりて  
 猫の姿 風もまきいて居  
 古庭や苔とみりふ未開紅  
 巴山 移石 百長 漢水 驢丹 竹之 春山

其引

春の柳や遊山鳥乃馬云近 秋虹

乃とふくやふさくまの流や 鶯脚

春に柳お小つをささる 梅風

春の水一月美人の影をゆ 林鳥

夷望

いとゆるや 俄るを流 水遊山 來之

春真

雨まの 小路よりむき花を 松鳥

春も 流るを 空を流の 柳をさ 宇鳥

柳も 花を 枝の 影をさる 松雨

山吹 小舎人の 小裙ゆり 呂風

柳 枝を 喜々 流る 柳をさる 杜道

と、 花の 影を 流る 柳をさる 思成

疎雪の影をたゞしく林簾の如し

郊外

雪間より見ゆる家む雪さか 湖柿

不入や土産の柿の如きも 菱湖

よれをやは持程おとせぬも小袖 言道

全

芹搦やゆきも小粒ふ豆袋の紐 来之

春真

喜喜や折子物様くさ棘とくさ 志江

木根の歩や裾吹之月杵地 上 栄枝

下流や雨の晴くる其日より 文可

谷陰より日仄くても雉乃色 梨笠

去き山一山をありく大文字 波曙

お授踏やまもむ山雲の日に白し 老著



春吟

湖南

若菜芽ふさしく小春ふゆ哉 規風

川口や唯柱木はき阿さ霞 秋化

とく風のうすく曲乃きうら 鼠響

慍おや麓をうけぬ東の影 呂鳥

さきし菴うきふやまきふ雨 其朝

高津路の東向とる柳の風 河州 桃源

春真

南紀

う絶うもやいつち向くもまね 社月

藪入やおもすしと 三井間を 花融

人

仙山

梅さくや葉おきうゆかぬれ枝 仙之

雉さくやまきと山ゆかりの山

草花さくや思ぬとらの野まき

去興

信里山

永き日なきあはれふかたき腸 暉翠

全

日金川

あはれよき髪愛のそき名を松風 虎川

う久歩はななく柳のちりき

猫の子乃日新道りゆる柳うれ 青岐

持てくや素より東風の海哉 葦々々

常目越きそけ度な柳か 楓志 大高

摘て果はる油に路中の柳ゆき 孤隣 達ア

東風はちまきのわたるやの渚のき、 喜色

おのそま乃ゆるきて暖は梅宗、 未梅

四明志のあー、  
P-送る

東氏

東へなき白いおのーぬあはれ風 李紅

望まぬいお状々るゆる牛の角 八千坊 浪谷

せむしのね言ひしはな

つのお雪おろすあり鬼の泣きやわす 蝶夢

降る夜のくさくさきひふまゝ 重厚

まき柵やおまきふさる雨乃冬 五雲

今降一宮のくほより音伝わり 蘭更

む月夜のおまき風いさゝかきくられや  
さびるよ月のとれおひのちうりしはな  
ほ無きうらみく鴨雁をめぐる

川とよちとち常ありまき乃月 來之

### 分類

十分ふ乃ほりて風のうた裁 眠花

凍と解のきほる甲やわら車 百景

宝引子文てわしはる新嘉 雅石

花と夜似合わぬあ履りとあふち 松翠

お好入わぬけそを切りしる歌 仙國

宵戸畑の菜花はな咲ぬ表軍装 雪馬

下筋や爆牛去り道の端 雅石

石畑のくさ草吹や春此風

う久い去の畑おじや梅の下 花笠

古松乃折もおり落き音る小 松波

小方登や山吹く川子ぬり松 焔水

とろ中や朽木も音るのじりり 古埜女

わき入ハ露てもさきかほく小 小石

イハ身は流る風や春去り 仙國

う絶るふ院未町の勢さり 稚石

音高や之舞舞まきり 卯辰 眠卷

を風や清涼こきもる傀儡師 規風

涅槃のち巻陰の中よ一件と  
おろきもみくればい

絶りまぬちまきり花福之像 芥水

とる以位匠者の扇お和涅槃像 來之

春興

神水魚波風中の引おは日知か 鳥門

春のゆきやうの土橋の踏心 春海

むえ

矢すく山よりきぬくむめのさ 嵐外

名山を人ふさ進く樹のうれ 素秋

名山を樹まうくく藤花 翹白

名山をいよくむれまほり高か 無外

春真

お花ろお子連一男を女子外 嘯山

田过小志は一古くうん女はを 賈友

石をきこ友誰く持燈月 如洋

釋多村と指さし年やも景描 斗雪

姑のむし小神や春乃風 呂蛤

名をくく候を春なく柳一丸 蕪亭

春之望

孫雪巾比良の丁解くやまは山  
こゝに竹露や竹乃井玉梅すけ  
浅苔は書かあろき園の萩のな  
白魚不一眼遊脱 とききしを  
かゆくをえとやうしとをき草掛

古

春鷗舎



57

